

春のバスツアー 「田中正造を学ぶ」

旧谷中村から足尾銅山跡を見学

今年の九条の会活動計画

野田・九条の会は、1月14日今年はじめでの定例会を開き、今年の活動計画について話し合いました。例年行なっている春のバスツアーは、公害を告発し徹底して住民の立場に立って戦った田中正造の精神を学ぶ旅を企画しました。田中正造は、足尾銅山から垂れ流された鉱毒から東京を守るため、渡良瀬川をせき止め、そこにあった谷中村を犠牲にしようとしたことに対し生涯を掛け反対したこと知られる。明治政府の富国強兵のために村民を犠牲にしたこのような考え方が、現在の日本で、原発を地方の過疎の村に押しつけ、沖繩に基地を押しつけていることなど、今もなお明治政府と同じに見えます。そこで改めて田中正造に学びたいと思います。ご家族、お友達を誘ってご参加ください。



田中正造 (大正元年撮影)

日時 4月8日(日)

行程：野田市—渡瀬遊水地谷中村跡—

田中正造記念館(館林市)—足尾銅山跡見学

観光バス利用でバス代と諸経費がかかります。詳しくは次号でお知らせします。

今年も賛同金を

よろしく!

野田九条の会は今年も賛同金カンパをお願いする予定です。年1回一人1,000円ずつお願いすることで秋に行う催しのチラシに九条の会のアピールを印刷し市内に新聞折り込みなどで4万枚配布出来きます。3月に皆様に封書でお送りしますので、郵便振込か、担当者に手渡しなどをお願いいたします。そしてこの機会にお友達などに九条の会を紹介してください。

さよなら原発1,000万署名目標数達成までもう一歩!

今月の予定

2月4日(土) 14時～

「今語るニューギニア戦の真実」

戦争語り部の会主催

樺のホール4階研修室

2月4日(土) 上記終了後 定例会

樺のホール4階研修室

2月9日(木) 午後4時

さよなら原発署名行動 愛宕駅前広場

3月10日(土) 午前10時～

学習会「田中正造と谷中村」

樺のホール4階研修室

4月のバスツアーに先立ち田中正造

について学びます。

野田九条の会として昨秋から取り組んできた脱原発の署名は900筆を超え、目標の1000筆までもう少しです。2月中に集計します。1月9日の成人式会場前でも若い方々も署名してくれ、15日には住宅地を個別訪問し50筆以上集まりました。ご協力いただきました皆さんありがとうございました。振込か、担当者に手渡しなどをお願いいたします。そしてこの機会にお友達などに九条の会を紹介してください。

九条の眼

田中正造と
足尾銅山鉛毒事件

真の文明は
山を荒らさず
川を荒らさず
村を破らさず
人を殺さざるべし



「真の文明は 山を荒らさず 川を荒らさず 村を破らさず 人を殺さざるべし」来年が没後 100 年になるという田中正造のこの言葉は、そのまま私たちに向けて発せられたかのように 3・11 復の今を照らし出してはいないでしょうか。彼が生涯をかけた闘いを追いながら考えてみようと思います。

足尾銅山は幕末には廃鉛同然でしたが、1877 年(明治 10 年)、古河市兵衛が買い取り製銅量は十数倍になり急激な発展を遂げました。一方でこの拡大生産による煙害と乱伐による環境破壊が進みました。上流部の松木村は壊滅的な打撃を受け、明治 34 年には廃村に追い込まれています。下流部では特に、1890 年(明治 23 年)の大洪水で群馬、栃木の渡良瀬川流域、広い範囲の農地に鉛毒水が侵入し、農作物が収穫皆無という深刻な事態になりました。これを契機に足尾鉛毒事件は表面化し、被害民や自治体による「鉛業停止ヲ請願スル」運動が盛り上がりました。

このような運動の盛り上がり背景にして、田中正造は 1891 年(明治 24 年)第二回帝国議会でこの問題を取り上げ質問、政府を厳しく追及し鉛毒事件は、広く知られるようになりました。しかし、政府は鉛毒被害の原因が足尾銅山にあることは認めながら、銅山擁護の立場を守り通しました。理由の一つは、銅は重要な輸出品で、明治政府の国策「富国強兵・殖産興業」を推進するための外貨獲得のために不可欠な銅山であったこと。もう一つは銅山(古河鉛業)と政府高官との癒着でした。農商務省銅山局長の「足尾銅山より生ずる公利は、被災地の被害よりはるかに大にして、充分に損害賠償によって取消し得られるべきものなり」という言葉が当時の政府の考えを表しています。加えて悪辣な示談交渉を画策しはじめます。

しかし 1896 年(明治 29 年)の大洪水で鉛毒被害が栃木、群馬に加え茨城、埼玉、千葉にまで及び、人体にも深刻な影響を及ぼすに至ります。被害総額は当時の足尾銅山年間売上高のほぼ 10 倍と記録されています。以後被災地の各市町村は、正造の指導で組織化され、運動を協力してすすめることになりました。

1897 年(明治 30 年)根が枯れて手でも抜ける護岸用の竹、毒葦灰、被害穀物など実物を示しな

がらの、2 時間余りの正造の熱弁は、議場に沁みわたる、深い感銘を与えたといえます。一方被害民は蓑笠・草鞋ばきで大挙して上京し陳情、請願する「大挙東京押し出し」をこころみています。その結果、ついに足尾銅山調査委員会が設置されますが、鉛業停止の方向へは進展せず予防工事をさせるというものでしかない、欺瞞に満ちたものでした。

1900 年(明治 33 年)には数千人が東京に向かう途中、待ち伏せの警官隊による弾圧を受け、多くの負傷者を出し、数十人が逮捕された川俣事件が起こります。被害民の苦悩などは全く念頭にない、今までとは異なる残忍・冷酷な大弾圧に正造は激怒し、鋭く政府を追及しましたが状況は変わりませんでした。

1901 年(明治 34 年)、正造は衆議院議員を辞職し、一国民として死を覚悟して明治天皇への直訴を決行しますが失敗。(直訴状は正造の依頼で幸徳秋水が起草)直訴によって世論が沸騰し、ついに政府も無視できなくなり、1902 年、第二次鉛毒調査委員会を設置します。しかし委員会は、足尾銅山の鉛業停止という本質には触れずに、「鉛毒問題」を「治水問題」にすりかえてしまいます。結果、渡良瀬川下流域に遊水池を設けるという計画のもと、洪水のたびに被害を受け続けた谷中村が廃村にされ、銅山は生き残ることになってしまったのです。

谷中村に移った正造の辛酸に満ちた闘いは次号に続きます。

参考文献：広瀬武『公害の原点を復世に』2001 年